

湿布薬について

乳房炎の原因は、そのほとんどが細菌感染によるものであるため、抗生物質の乳房内注入や、症状が重い場合には全身投与を併用する治療法が主体となります。原因である細菌を直接たたくことから、抗生物質による治療法を原因療法といいます。それに対し、頻回搾乳やオキシトシン投与による排汁促進、湿布は、主体となる治療を補助する目的で応用されることから補助療法といわれます。乳房が腫れた牛を診ると、症状のある分房にすでに湿布薬が塗られているのを多く見かけます。湿布は酪農家ができる処置として実際に広く取り入れられていることがわかります。

動物用医薬品として使用できる湿布薬としては、10種類程度の製剤が販売されています。これらは関節炎や打撲、捻挫といった主に四肢の消炎鎮痛目的での効能で認可されています。

ます。従って乳房炎の消炎に対しては効能外使用となってしまうことが、全国農業共済協会が発行する「家畜共済の診療指針」には、「発病初期には冷湿布を、以降は温湿布を行う。再発を繰り返す慢性乳房炎に対して温湿布を実施すると予防効果が認められる症例もある。」と記載されています。人の乳腺炎に対しても、昔から湿布が応用されていたようです。民間療法としてジャガイモやサトイモなどをすりおろして乳房に貼つてたり、キャベツを直接乳房に貼つたりといったことが、穏やかに冷やして痛みを取る方法として用いられてきたようです。

さて、実際に牛に対して用いられる湿布薬ですが、剤形としては、塗布するタイプの軟膏剤とスプレーできる液剤のものがあります。スプレータイプの製剤の中には、色素が

配合されて薬がかかった部分がわかりやすいように工夫されたものもあります。有効成分としては、多くの製剤にメントール、カンフル、サリチル酸メチル、トウガラシ抽出成分（カプサイシン）などが配合されています。これらがワセリンやグリセリン、エタノールなどの基材に混ぜられてできています。

冷湿布は、メントール、カンフルなどの冷感刺激により、患部にひんやりした感覚を与える冷感湿布であり、温湿布はトウガラシ抽出成分の温感刺激により、患部が温まった感覚を与える温感湿布です。サリチル酸メチルは消炎鎮痛作用を持った成分です。打撲や筋肉痛などで湿布を使用する場合、初期の2〜3日間は患部に熱を持っているので冷やすための冷湿布を、その後は患部の血行を促進して炎症物質を取り除くために温湿布を使用すると良いとされています。しかし温湿布にも冷感成分が配合されており、どちらの湿布も同じような鎮痛作用や消炎作用を持っています。また、患部を冷やしたり、温めたりするほどに皮膚の温

度に変化するというものもないようです。実際に患部を冷やすのであれば氷嚢などを使ったアイシングを、温めるのであればカイロなどを使用する必要があります。

では、湿布はどちらでもよいということになるのでしょうか。温湿布は熱を持った時期に使うと、トウガラシ成分の刺激でかえって痛みが増すことがあり、避けたほうがよいのですが、その時期を過ぎればあまり神経質になる必要はなさそうです。実際の冷湿布と温湿布の使い分けは、患部を冷やした方が心地よければ冷湿布を、温めた方が心地よければ温湿布を使用するとよい、と説明されることが多いようです。もちろんこれは人での話ですが、牛もどちらの湿布が心地よいか教えてくれるといいですね。

（虹別家畜診療所 診療課 山本康了）